

さくら、もゆる、季節
にて

ぴんころ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

クロちゃんエンドの後のお話（妄想）

目次

この季節（生涯）を君と共に	—	1
桜の花咲く道を一人で歩く日も	—	12
思い出の中にだけ あなたを探した		20

この季節（生涯）を君と共に

目を覚ます。

今日からはいつもと違う毎日が始まる。

あの子と一緒に暮らすことになる。

うちの両親が万年新婚夫婦であるために突発的に発生する新婚旅行。

それにあの子の両親がついていくことになったらしく、その間だけではあるが一時的に我が家で一緒に生活することになった。

正確には昨日から来ているわけだけど、今日は彼女が来てから初めての朝。

緊張でなかなか眠れなかったから今もまだ眠いけれど、その眼をこすりながら体を起こす。

「まだ六時か……もう少し眠れるかな？」

呟いて、起こした体をまた横にする。

あの子は、どちらかといえば夜行性で朝は弱い。

だからこんなに早く起きたとしても、胸の中に普段とは違うこと……彼女と会えるっという出来事が起こるんじゃないかというドキドキがあっても、この時間帯では発生す

る余地がない。

……そう、思っていたのだけれど。

「……………」

コンコン、とノックをする音が聞こえる。

ハツと息を飲む。

もしかしてあの子じゃないのか。

そんな期待が膨らんで、ついつい返事が遅れる。

慌てて返事をしようとする、それよりも早く扉が開く。

この時間帯だと姉さんは多分食事の用意をしているし、妹はまだまだ寝ている時間だ。

父さんと母さんは昨日、何回目か数えるのも億劫な新婚旅行に向かったから家にはいない。

そこまで考えたところで、半開きになった扉から、ノックの主が姿を見せる。

……思っていた通り、あの子の姿がそこにはあつた。

「……………」

こちらを見て驚いている。

ノックをしても返事がなかったから起きていないと思つたのだろうか。

けれど、それでも入って来たってことは何かあるのだろうか……？

「……起きてる」

「ああ、うん、起きてるよ」

「ノックの、返事はなかったから、私が起こそうと思ったのに……」

「うん、ごめん。ちよつとぼうつとしてた」

灰色の猫耳パーカーのパジャマ。

彼女が持つ生来の猫のような雰囲気ぴったりで、ここ数年目撃することのなかったパジャマ姿という事実が、一緒に暮らしているという実感をぼくにくれた。

「おはよう、クロ」

「うん、おはよう」

昔からの愛称で呼ぶと君は笑って。

その顔がとても可愛いとは知っていたけれど。

こうしてその姿を朝から見る事ができてどこかホッとしていた。

「もう、ご飯できてるって」

「そうなの？」

珍しい。

姉さんは普段朝ごはんの時間をだいたい七時くらいにしている。

今日に限ってそれを早くする理由なんて……

「あ……」

あつた。

というよりも目の前にいた。

そういえば確かに昨日の夜、クロが来たことで豪勢になった夕飯の席でそんなことを言っていたような覚えがある。

今日から花嫁修行つてことでクロにも厨房に立つてもらおうつて。

余裕を持ってやりたいから、いつもよりも早く準備するつて。

「どうかした？」

「ううん、なんでもないよ」

そんなことを考えていると君に疑問をもたせてしまったみたいだ。

行こっか、と言って手を差し出す。

君は恥ずかしがりながらもぼくの手を取ってくれた。

今日もまた、一日が始まる。

さくら、もゆ

学校にたどり着くと、喧騒が広がっていた。

中心にいるのは昨日転校して来た生徒、柗ハル。

ぼくたちには一生縁がなさそうな相手だ。

「君、は」

横にいた君からの声に、そちらに目を向けると、どこか不満そうな、そして不安そうなクロの顔が。

なんでだろう。

何かしてしまったのだろうか。

「あの転校生みたいな子が、好き、なの？」

「……………え？」

意味がわからなかった。

「どうして、そう思ったの？」

だから、聞き返した。

「だって」

口をもによもによと動かしながら、小さな声で君は言う。

「ざつきから、あの転校生の子のことばかり見てるし……」

なぜか、瞳が潤んでいる。

君のそんな顔は見たくないと思っているのに。

ぼくのせいでそんな顔をさせてしまった。

「そ、そんなことないよ！」

少し大きな声で否定する。

幸いにも、朝礼前の喧騒の中では目立たなかったようで、教室中から視線を受けることはなかった。

「そう……」

君はぼくの答えを聞いて、そっぽを向きながらもどこか安心したよう。

よかった。

どういふことかわからないけれど、君の機嫌が直る……とまではいなくても、これ以上悪くなることはなかったみたいだ。

いつものように今日の分の教材を用意する。

「あ……」

そんな時、通学鞆の中に入れてある姉さんの手作り弁当が目に入る。

そうだ。

「どうか、した？」

「うん、あのねクロ」

昨日、あの糸電話でまた話せるようになった君と、今日、姉さんから持たされた二人お揃いのお弁当。

この二つが、ぼくに勇気をくれた。

「今日のお昼、二人で一緒に屋上で食べない？」

さくら、もゆ

そんな二人の姿を私、終ハルは朝礼が始まるまでの間に発見していた。

とは言っても、その程度。

私に何かできるようなことではない。

あの友達以上、恋人未満の見ているもどかしい関係性の二人に手出しできることなんてない。

華の女子高生として、同じクラスの仲間として、あの二人の恋愛には興味があつただけど……

「ねえ、ハルちゃん」

「え、あ、な、なに姫織ちゃん？」

話しかけてきてくれたのは黒髪がとても綺麗な女の子。

この学校に転校してきてまだ馴染めていないーとは言っても昨日来たんだから当然なんだけどー私に話しかけてくれて仲良くしようとしてくれる素敵な女の子。

「なんだか朝からぼーっとしてるように見えたけど、どうかしたの？」

「え、あ、うん、ちよ、ちよっとね」

さすがに全く関係ない人にまで広めるのはあの二人にも迷惑だよな？

そう思つて隠す。

自力で気づいたならしょうがないけど、そうでないなら隠さないと。

そう思つていたけれど。

「もしかして、『全校生徒に聞いた、とつととくつついてほしい男女ランキング』でトップを飾った二人を見たの？」

「なんなのそのランキング!？」

驚いた私は大声を上げてしまった。

「お？　　そういえば終さんは知らなかったよな」

「まあ、去年のランキングだしね」

「あの二人、見てもどかしいのよねー」

「いや、でも昨日、二人で手を繋いで帰つてる姿を目撃したつて話があるぞ」

「え、それほんと？」

「ああ、しかも今朝に関しては一緒に登校して来たらしい」

「そつちはいつものことでしょ」

え、え？ これは何？ 一体どういうことなの？

わらわらと集まって来たクラスメイトたち。

「どうやら『全校生徒に聞いた』というのは伊達ではないらしく、皆あの二人については知っているようだった。」

「あの二人、自分たちでは目立ってないつもりで、私たちもそれを理解しているから関わらないようにしているけど。本当は皆、とっとと付き合えて思ってるの」

まあ、しょうがないよねなんて苦笑する姫織ちゃん。

うん、そうだ。私も頷く。

「あの子、同性の私たちから見ても可愛いもん。男から見たらそりやそうなるよねって話ですよ」

「うん、わかる。わかるよ。あの子、お隣の男の子にしか懐いてない感じがあるよね。本当の幸せそうな笑顔を見せるのが男の子だけって感じが」

「最初の頃は告白しようとした男子もいたけど、あの二人が相手が見ていないところでその相手を視線が無意識に追ってるんだもん。告白のために何組の誰々ってことを確

認しようとした人たちはそれを見て撃沈したらしいよ」

「見ててじれつたい気持ちもあるけど、下手にいじつてあの尊い関係を崩すのはダメだもんね！」

「うん、そう。……でも今日からは手出しするけど」

「え」

私の意見に同意してくれた姫織ちゃんは、すぐにその意見とは真つ向から対立する言葉を放った。

「あの二人が話すようになったっていうことが本当だつて確認は取れてる？」

「ええ、きつちり目撃してますよ」

「普段、誰とも話さない、お互いと話しても恥ずかしそうに最低限しか話さなかった二人が、糸電話を使って嬉しそうな表情で話をしているところを！」

「そう……ならそれはつまり『二人の関係が進展した』ってことだよな？」

「はい！」

「なら、ここに宣言しましょう。『二人にとつと恋人になつてもらいましょう大作戦』の発令を！」

「え、ええー！？」

昼休みの教室。

私の叫び声は、直後に教室の中に轟いたクラスメイトたちの雄叫びにかき消された。

桜の花咲く道を一人で歩く日も

「でも、その、ふ、『二人にとつとと恋人になつてもらいましよう大作戦』つて何をするの？」

私は姫織ちゃんに尋ねる。

名前を聞く限りでは、二人に恋人になつてもらうために意識をさせるのではないかというような作戦だとは思うけれど。

じゃあ、実際に何をするの？ と言われるといまいちピンとこない。

「ふっふっふ。それはね」

「ゴクリ」

ちよつと汗が出てきた。

あの二人が結ばれるようになるまでに、私たちに何ができるのだろうか。クラスの大部分が楽しんでるように思うけど、それでもきつと本心から協力しようと思っている人はいるはずだ。

「まだ決まってません！」

ズコーっと、ギャグ漫画のように私は転ぶ。

「き、決まってるの!？」

「そうなんです。なので」

すつと姫織ちゃんとはある方向を指差す。

そこにはクラスメイトたちがたむろつては顔を両手で覆い、『尊い』や『砂糖吐いて死にそう』なんてつぶやいている。

その中心にあるのは、あれだ。

『クロ、美味しいかな?』

『うん、美味しいよ? さすがはお姉さん、だね。じゃあ、今度は私から。……恥ずかしいけど、誰もいないときぐらいいしかできないし』

『……? 何か言った?』

『ううん、なんでもない。……はい、あーん』

『あーん』

尊い!

そんな感想しか出てこない。

できることなら私も今すぐにあの周囲で砂糖を吐きそうになっている集団に混ざりたい。

誰がいつ仕掛けたのかわからない盗聴器については触れることなく、ただ純粹に心の

底からそう思う。

けれど、人前でそんなことをしようと思えるほどに私は豪胆ではなくて。

今この場では『作戦内容について聞く私』でいいといけないうと、そんな反応をして
いる。

「あれを聴きながら作戦を立てましょう」

「……私たちも死屍累々の仲間入りをしそうな気がするなあ」

苦笑いだ。

「とは言っても、作戦はすでに一つだけあるんだよ」

「と、兎蛙くん？」

クラスメイトの一人、兎蛙智仁くんがそこに口を挟んできた。

まだ、クラスの人たちの名前は全員分覚えられてはいないけれど。

それでも彼のように、少し前の代にまで遡るだけで有名な作曲家が出てくるような、
クラスの中にある『学校の有名人』というような人物の名前なら知っている。

本人の、『音楽になりたい』っていうのが、言葉だけだと何を言いたいのかわから
ない、いわゆる変人と呼ばれる類の言動であることも有名な理由の一つではあるだろう
けど。

「俺たちの立てた作戦っていうのは、まずはこれだ」

そう言つて、彼が指を向けたのはどのクラスにも置いてあるものだった。

さくら、もゆ

「あれ？」

昼休みは屋上で二人で食べて、そうして教室に戻るころにはまた拳一つ分程度の距離が開いて。

そうして僕たちは教室にまで戻ってきた。

誰にもバレてはいなかったと思う。

午後の授業も、君が眠たそうに目をこするのを眺めて過ぎ去つて。

迎えた放課後。

「傘がないや」

僕が今朝の天気予報、午後からの降水確率を見て持つてきたはずの傘が、いつのまにか傘立てから消えて無くなつていた。

なんでだろう、確かに持つてきたはずなのに。

「クロ、ぼくの傘を知らないかな？」

「持つてきてた、よね？ ないの？」

「うん。誰かが間違えて持ってたのかな？」

「そう……」

そう言った君は、目を閉じて何かを考えているようだ。

ぼくはもう、雨が小雨になるまでは学校で時間を潰そうと考えている。

君にまで付き合わせることはないと思ったから

「クロ、先に帰っていいよ。ぼくはもう少し雨が弱くなったら走って帰るし」

二人で同じ家。

なので、委員会や部活に参加していないぼくたちは、二人で帰ろうと約束している。

それを、こんなに早く破ることになって申し訳ないとは思うけれど。

それでも、暗い夜道を君に歩かせるよりはましだと思っから。

ぼくは、そう言った。

「……だめ」

「え……？」

「だめ、だよ」

「でも」

「二人で一緒に帰る。それが約束、だから」

「でも、クロまで残ることなんて……」

「残る必要なんて、ないよ」

これがある、と恥ずかしそうに君は、自分の傘をさして言った。

「二人で、この傘を使おう」

さくら、もゆ

「……」

「……」

二人で相合傘をして帰ることになった。

たったそれだけのこと。

それだけのことなのに。

「……」

どうしようもなく話す内容が見つからない。

肩が触れ合って、手が触れ合って、ビクツとなって少し離れて。

そんなことの繰り返し。

君の名前を心の中で口にしてみる。

それだけでなぜか。

君が生まれてきてくれて、そしてこうして名前を呼びあえる距離にいるというだけなのに。

たったそれだけのことが無性に嬉しく感じて、胸の中がポカポカと、温かい感情に満ち溢れる。

恥ずかしい、恥ずかしい。

ただ名前を口にしたいただけなのに、それだけのことが無性に遠い。

「クロ」

君が、私のことを呼んでくれる。

君しか呼ばない、私の愛称。

この真白の髪とは真逆の呼び方。

昔、「白髪のくせにクロなんて」とからかわれたこともあつたけれど。

それでも、君にそう呼ばれるのが嬉しくて。

「何……？」

ああ、またやつちやつた。

ちよつと不機嫌そうだったかもしれない。

嫌われないうか。

いつも、ちゃんと言いたいことを言えないから、いつも「どうして私はこうなの！」と

思ってしまう。

「ちよつと離れすぎじゃないかな？」

そのままだと濡れちゃうよ、なんて少し距離を詰めながら君は言う。

手と手が触れ合う距離。

このまま、手を繋いで。

腕を組んだり……は恥ずかしいからできないけど。

それでも、君の手を、自分から君の手を握ることができたなら、きつと自信が持てると思う。

だから恥ずかしさをこらえて

「うん。……なら、離れないように、しないと」

ぎゅつと、その手を握った。

思い出の中にだけ あなたを探した

「おかえり……つてクロ、どうしたんだい、そんな風に濡れちゃって……まあ、もしものことを考えてお風呂は沸かしておいたから早く入ってくるといい」

相合傘で帰ってきた時、クロはひどく濡れていた。

それはもちろん、ぼくがクロを追い出して自分がちゃんと傘に入るようにしていた、というわけではなく。

ただ単純に、帰り道で水たまりにこけたからだだった。

そんな途中経過を知らない姉さんが、クロを無理矢理にお風呂場へと連れて行く。

「え、あ……ちよ、ちよつと待って……！ 着替え、着替えを持ってこないと……！」

「そんなのは私がつてくるさ。早く入らないと風邪を引いちゃうし、そうなるのであれば一緒に学校にいけなくなるぞ？」

「……それは、困る」

「だろう？」

だから早く入っておいで、と柔らかい笑みを浮かべて姉さんが言う、テンパっていたクロもそれに従ってお風呂場に行く。

それを見送って姉さんが。

「覗いちやダメだぞ?」

「覗かないよ!」

横で、いつもぼくに向けるのとは少し違う笑顔で言った言葉に思わず食い気味に否定した。

さくら、もゆ

「あー」

部屋で一人、やることもないので待っている

宿題が出ているけれど手をつけるわけにもいかない。

それはどちらからともなく言い出したわけでもなく、ぼくとクロが“二人で一緒にやる”と気がつけばそうなっていたこと。

「?」

あれ……?」

今、何だか部屋の外から声が聞こえたような。

そう思って耳を澄ませてみるとリビングの方からだろうか、クロと姉さんの声が聞こ

えてくる。

何だか、クロの声が怒っているような気がする。

何か、あつたのだろうか……？

クロに何かあつたのではないかと思つてしまえば、自分が気がつくよりも先に足は動いていた。

姉さんがクロに何かするとは思えないが、だからだろうか。

そんな中でクロが怒つてしまうような何かがあるのはちよつと気になる。

……もしも仮にクロが嫌がることをしているのであれば、それは怒る必要がある。

あの子は姉さんのおもちやじゃないんだ。

「姉さん、何やって——」

「っ!？」

部屋からリビングに行く、すぐにクロが姉さんの後ろに隠れた。

……少し悲しい。

でも、ちよつとだけホツとした。

姉さんの後ろに隠れているのであれば、姉さんをそこまで嫌っているわけではなさそうだから。

何かひどいことをされているわけじゃないんだって、姉さんがひどいことをしている

わけじゃないってことがわかったから。

「いやー、今日は雨が降ってたじゃないか。雨の降り始めに私も出かけてたせいで、まだ着替えの服が濡れたままだったんだ。だから私が作った服を着てもらったんだけど、それが恥ずかしいって……」

「だ、だって!」

こんな服恥ずかしい、ともによもによと口を動かしているクロ。

あの子の姿は姉さんの陰に隠れているけれど、その言葉を口にしてしているクロの姿は思っている。

「でも、そうになると今日は裸で過ごすしか無くなるよ? そっちの方が恥ずかしくないかい」

「それは……そうだけど……」

「大丈夫、今の君はとても可愛いよ。弟も、君がどんな格好をしていても笑ったりするよ。うな子じゃないだろう?」

「……うん」

そう言っただけで姉さんに促されて出て来たクロの姿は。

見たことがないはずなのに、見覚えがあるような、そんな不思議な姿。

「コンセプトは魔法少女さ」

姉さんが嬉しそうに言葉にしているが、それも耳に入ってこない。

「どう、かな……?」

魔法少女、という言葉に何だか胸が疼くが、その理由もよくわからない。

どうして何だろう。

どうして、その姿を見るとこんなに悲しい気持ちになるんだろう。

どうして、その姿をしているクロを見るとこんなに嬉しい気持ちになるんだろう。

「似合う、かな……?」

ほら、と姉さんに肩を小突かれたことでクロの言葉がようやく耳に届いた。

「う、うん。似合ってる。すごく似合ってるよ、クロー!」

ちよつと焦った。

声も、ひっくり返っていたような気がする。

でも本心だから、少し恥ずかしいけれど充足感のようなものもあって。

彼女に思ったことをそのまま伝えられたことがとても嬉しい、なんて不思議な感情。

「そっか、よかった」

不安そうな君が笑顔になってくれたことが嬉しくて、何だか照れ臭い気持ちも少し吹

き飛んだ。

「ほら、この子を待たせちゃダメだろう?」

お風呂に入っておいで、と姉さんに送り出された。

さくら、もゆ

「えっと、クロ……？」

お風呂を上がって部屋に戻ると、その隅っこでクロが膝を抱えて座っている。

顔は隠れているけれど、何だか怒っている……？

「ここにいる子猫は怒ってるので話しかけても答えません」

「えっと……」

ぷくつと頬を膨らませたクロがこちらを見ずにそんなことを言う。

ちよつとシヨツクだ。

こんなことを言われる理由が思い浮かばない。

「君がこんなものを持つてるなんて、思わなかった」

こつちを見たクロは恥ずかしそうに顔を赤くしている。

こ、こんなと言ったクロが取り出したのは見覚えのない表紙の二冊の本。

と言うか、これは……。

「え、エロ本!? 何でこんなものがここに……」

びっくりして叫んでしまった。

クロも、ぼくの叫びにびっくりしてしまっている。

目をぱちくりと見開いたクロには悪いことをした、と思ってしまったけれど。

それでも、こんな姉ものつぽい本も、妹ものつぽい本も、そもそもそんな本すら買ったことのないぼくからしたら、その本はあまりにも想像の埒外にあったもので。

「君のものじゃ、ないの？」

「う、うん。ぼくはこんなもの、買ったことないよ」

「でも、お姉さんからはベッドの下を探したらって……」

姉さんが？

なんでこんなものがあることを姉さんが知っているのだろうか。

もしかして……。

「うん。それなら良かった」

「え……？」

「この本、君は関係ないんだよね？」

クロの言葉に、全力で頷く。

こんな本、初めて見た。

「うん。それならいいよ。今は宿題をしようか」

あとでお姉さんに話を聞いてみよう、とそう言った君はカバンの中から宿題のプリントを出して。

雨の中転んだせいで少し濡れているプリントを乾かしてからじゃないと宿題はできないので、それまでの間は何か別のことをしよう、と苦笑いをして。

そうして、部屋の中に何かないかと探して見つけたアルバムを見ることにした。けれど。

「……」

顔が近い。

二人で一つのアルバムを見る関係で、とても顔が近い。

恥ずかしい。

それでも、離れようとはほくも、多分クロも思わなかったみたいで、二人でその思い出を振り返る。

中学時代、クロが恥ずかしいと思っていた時、ぼくとクロがほとんど話せなかった時期のことを、お互い何をしていたのかを話し合う。

お互いのことならどれだけの時間でも楽しく聞いていられるんじゃないかって、そんなことも思ってしまう。

何時間も何時間も、元々「プリントが乾くまで」で見えていたことも忘れて話をしてい

て。

お風呂で体があつたまつていたこともあつて、ぼくたちはどちらからともなく眠つてしまつていた。

あとで姉さんにその時のぼくらの写真を見せてもらったけれど、二人で手を握つていたのが恥ずかしくて、クロも手を握つてくれていたのがなんだか嬉しくて。

何を口にすればいいのかわからなかった。